

Title	書評：塩原良和著 『変革する多文化主義へ：オーストラリアからの展望』 法政大学出版局、2010年
Sub Title	
Author	五十嵐, 泰正(Igarashi, Yasumasa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.144- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0144">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0144</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：塩原良和著

『変革する多文化主義へ—オーストラリアからの展望』

法政大学出版局、2010年

五十嵐 泰正

評者は、著者の塩原さんとこの3年来、数回の雑誌の企画やシンポジウムなどの公開・公的な場から、もっと数多くの小規模な研究会や飲み会のような場まで、本書のテーマになっていることに関して、繰り返し議論する機会に恵まれてきた。そしてそのたびに、ほぼ完璧に現状分析で一致し、価値判断や戦略的な展望で意見を違えるということを繰り返している。こうした経緯の上で、多文化主義やオーストラリアの研究からは程遠い私に本書の書評を依頼してきたということは、著者がこの3年間の議論の続きをなさりたいものだと勝手に解釈し、いさか書評というフォーマットの枠を越えた文章を書くことをお許し願いたい。

私にとって、本書を一読した印象も、塩原さんとのこれまでの数々の議論を思い出させるものになっている。オーストラリアでの豊富な実践的研究をもとにした、ネオリベラリズム下での排除／選別をめぐる人種・階級編成の組み直しを論じた第3章や、移民コミュニティの中の階層的分断を議論する第4章といった極めて明快かつ鋭利な整理には、いつもながら感服させられる。さらに、単にミドルクラス移民を包摂の対象、下層移民を排除の対象とシンプルな構図で捉えるにはとどまらず、シドニーでのインド系留学生への襲撃事件の事例を挙げながら、

「有為な人材」であるがゆえにミドルクラス白人にとっての直接の競合相手となるミドルクラス移民も、排外感情の標的となりうると指摘していることは重要だ。これは、一部のグローバル展開を重視する企業が留学生の積極採用を打ち出したのに対して、その新卒就職市場全体への量的なインパクトの小ささからするとヒステリックなほどに、就活生への危機感を煽る論調や、日本企業の「国民軽視」を非難する議論までもが登場している日本の現状に対しても、きわめて示唆的なものである。

しかし、こうした怜悧な分析を展開してきた著者が、まるでどこかのセカイ系アニメの最終回のように、「つながることの喜び」の称揚という、ベタに規範的でアイデアリスティックに過ぎる形で本書を締めくくったことには、正直なところ評者は面喰らってしまった。著者は、グローバル化の渦の中で生きる私たちにとって、他者との出会いが、強迫感やパラノイアを感じさせる契機になってしまふ場合もあることを指摘しつつ、他者との対話は、温かな「居場所」の感覚を与えてくれるものもあると期待をかける。しかし、エスニシティや言語の異なる他者どころか、世代間の認識の断絶が著しく、さらには同学年のクラスルームの中でさえ、微細なサブカルチャーやライフスタイルの違いに応じた「島宇宙」化の傾向が強まるなど、同質性の心地よさに閉塞する傾向がますます強まっている感がある現代日本において、その（筆者も

自覚している通りの）樂観的な期待はいささか空しく聞こえてしまう。

これは、「主流国民にマイノリティと実際に対話してもらうためにはどうすればいいのか」という問い合わせ、「ジグソーパズルの最後のかけら」においてしまったことによる帰結ではないだろうか。もちろん、実践的なエンカレッジを重視して学生たちに向き合ってきた著者だからこそ提示し得る、この問い合わせの真摯さには大きな感銘を受ける。しかしこの問い合わせは、まずは日豪を往復するアカデミシャンという「特權的」な立場からの説教くさいパターナリズムに陥る危険性を孕んだものであり、それを避けようとすれば——筆者はその回避には成功しているように思われるが——最早そこには、あえて樂天的に振る舞い、「つながることの喜び」に賭けてみるという隘路しか残されていなかつたのではなかろうか。

評者としては、この最後のピースには、「主流国民とマイノリティが対話を始めるには、どういった社会的・経済的条件が必要か」という問い合わせを置くべきであったように思う。筆者は第一章でガッサン・ハージの考察を引用し、他者の存在が、親にとっての子供と同じ「贈り物」として無条件に承認され、「大切な」人間として扱われる事が、多文化主義の根源的な根拠である（べき）だと論じている。評者は、他者をその貢献度で図ろうとするミドルクラス的多文化主義を拒否する論理として、筆者のこの多文化主義理解には同意する。しかし、主流国民が他者の存在を承認すべき「贈り物」と感じること、なかんずくそれが「義務付けられている」と感じるためには、「無条件」というわけにはいかないだろう。哲学的議論を回避して感覚的な言い方をすれば、そのためには、「自分自身も大切な存在として扱われている」ことを要するではないだろうか。

実は評者も、必ずしも悲観的なわけではない。評者は、多数の外国人が働く北関東の工場、農場や飲食店でのフィールドワークで、外国人の従業員や同僚と「つながることの喜び」を感じている人々に、実際に数多く出会ってきた。ただ、そうした職場は例外なく人手不足に悩んでおり、少なくとも外国人労働者が、日本人労働者の生活や地位を競合的に脅かすような存在ではなかつたことが、「つながることの喜び」を担保していた大きな要因であったことは否定できない。

しかし筆者も十分に認識しているように、日本でもオーストラリアでも、近年のネオリベラリズムの潮流は、主流国民も含めた人々をより苛烈な競争に追い立て、労働条件・生活条件を次々に切り下している——言ってみれば、「人間を大切にしない」ようになった世界に我々は生きている。こうした状況の中で、同じ主流国民とマイノリティの競合的（に見える／に見せかけられる）状況がいったん発生してしまうと、本来は同じ苦境を共有しているにもかかわらず、両者の連帶・共闘は一層困難なものになるだろう。そして直截に言えば、現在の日本の財界主導の「労働開拓」論に象徴されるように、いま国境を越えた労働力移動のさらなる流動化を最も待ち望んでいるのは、安価な労働力を潤沢に調達可能にすることで、「人間を大切にしない」システムを温存・延命させたいと思っているグローバル資本に他ならない。ここは、決して軽視してはいけないポイントであろう。

だとすればここで、「主流国民とマイノリティが対話を始めるには、どういった社会的・経済的条件が必要か」という問い合わせに対して、一つの皮肉な回答が導き出されてしまう。すなわち、「対話の前提となる人間を大切にする社会を築くために、無制限・無戦略な労働力の供給増大は避けなければならない」、言い換えれば、「人間を大切にする社会を築くためにこそ、量的にも質的にも、国境を越える人々の管理と選別を行わなければならない」というパラドクスである。

本書の中心的なモチーフの一つは、オーストラリアの多文化主義が移民の管理と選別を前提としたものへと変質していったことへの批判であるが、他者への敬意を持った対話を重視する筆者の多文化主義論からは、管理と選別の否定を導き出すことはできないのではなかろうか。より正確に言えば、「すでにそこにいる」マイノリティへの管理と選別の否定は導き出せるが、「将来的にここに来るかもしれない」マイノリティの管理と選別はむしろ前提条件とせざるを得ないように、評者は考える。この点に関しては、ほとんどの日本の多文化主義に関する議論と同じく、出入国管理における管理・選別とすでに定住しているマイノリティに対するそれとをはっきりと峻別しないままに、原理的な次元で管理・選別に対する批判を行っていることが、筆者の議論展開のひとつの難点になっているようにも思われる。

とはいって、国境を越える人々の管理と選別に対しては、まったく別の観点からの本質的な批判は避けられないだろう。先進国が「人間を大切にする社会」を構築するために出入国管理を強化することは、おそらくは先進国以上に「人間を大切にしない社会」である発展途上国からの移動を拒絶する、いわば一国平和主義的な態度に他ならない。それにそもそも、グローバル化したこの世界の中で、国際労働移動の規制を前提に国内の労働条件を向上させてゆくことは、その国からの労働そのものの流出（＝製造業やバックオフィスの海外移転）を招いてしまうがゆえに、経済学的にも最早不可能な選択肢なのかもしれない。

こうした更なる論点も視野に捉えつつ、「主流国民とマイノリティが対話を始めるには、どういった社会的・経済的条件が必要か」という問い合わせをめぐって、国境を越える人々の管理と選別の是非を塩原さんとあらためて議論してみたい。

（いがらし やすまさ 筑波大学大学院准教授）